

乱石組雨落溝の構造と変遷

はじめに 古代建造物において屋根を伝って軒下へ流下する雨水を処理する方法のひとつに雨落溝がある。雨落溝といっても、その実際は多様である。雨水を自然浸透させるもの、あるいは雨水を導水させるため底部を舗装するものに大きく分かれ、さらに護岸の方法などから細分が可能である（中山敏史「雨落ち溝」『古代の官衙遺跡 I』奈文研、2003）。また、大型の建物でも雨落溝が存在しない事例もあり、その様相はバラエティーに富む。本稿では、円礫などを主体的に用いる乱石組雨落溝をとりあげ、石材サイズに着目してその変遷を追い、若干の考察をおよぶ。

分析対象 亂石組雨落溝といつても、底部に石を敷く場合、および素掘りの場合がある。ここでは底石を敷く乱石組雨落溝の事例を概観し、その構造について考えてみたい。なお紙数の都合上、本稿では6～8世紀における飛鳥・藤原・平城地区の寺院や宮殿関連遺跡を検討対象とし、特記した事例をのぞき、創建期の遺構をあつかう。

飛鳥寺 中金堂の雨落溝は、幅120cm前後、側石は長軸長40～70cm、底石は長軸長20～30cmの円礫を用いる。底石は5列前後敷く。中門の雨落溝は若干狭く、幅90cm前後（奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』1958）。

川原寺 塔・西金堂の雨落溝は幅60cm、中門では北側で幅約110cm、南側で幅約75cm。底石は塔・西金堂、中門南側の底石は長軸長20～30cmで4列前後、中門北側ではほぼ同じ長軸長で5列前後の円礫が敷かれている。側石は長軸長約45～70cm（奈文研『川原寺発掘調査報告』1960）。

石神遺跡 A3期（齐明朝頃）における西側中枢部の東面回廊SC820にともなう雨落溝SD790は、幅60～80cm、底石は長軸長20～30cm程度の円礫を4列前後敷き、側石は長軸長40～50cm前後の細長い円礫を用いる（『藤原概報18』）。

飛鳥京跡 III-A期遺構（後飛鳥岡本宮段階）では、内裏内郭の東西棟大型建物SB0301の西側にならんで位置する建物SB0401の雨落溝SD8540・8541、またIII-A・B期の内郭南門SB8010、および内郭南門に取り付く掘立柱塙SA8020の雨落溝SD8021・8023・SX8022・8024を

はじめとして、ほとんどの主要建物の雨落溝が底石3列で、側石・底石ともに長軸長30～40cmの円礫を用いる（奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡III』2008）。

本薬師寺 金堂跡の雨落溝が階段部付近で一部確認されている（『藤原概報21』）。幅約50cm、石のサイズは側石・底石とも長軸長20～30cm前後の平たい円礫を用いる。底石は2列で、その後平城遷都とともに移された平城薬師寺と同じ個数だが、平城薬師寺では当該部分では幅30cmと狭くなっている。本薬師寺中門SB130の雨落溝SD135・136は、幅約60cmと金堂雨落溝と幅が近似し、石材も金堂と同じく長軸長20～25cm前後の円礫を2列敷き、底石と同じサイズの石を側石としている（『藤原概報24』）。

興福寺 中金堂SB8000の雨落溝SD8050・8051は底石が2列、一部3列でならぶ（II期＝奈良・平安期）。南面回廊SC7416・東面回廊SC7500の雨落溝SD7503・7420はともに幅約40cm、底石は2列にならぶ。幅広部分以外は原則として2列とみてよいだろう。側石底石ともに長軸長20cm前後の円礫を用いる（興福寺・奈文研『興福寺』I・III・IV、1999・2002・2003）。

乱石組雨落溝の変遷 以上の事例検討から、底石を有する乱石組雨落溝は、時期が降るにつれ構造が変化したことが予想される。用材サイズの変化に注目すると、側石と底石が同一サイズになることが画期の指標となる。具体的には、側石が大きく、側石より小型の石を底石として5列前後敷き詰めた飛鳥寺（I類、側石>底石）、4列前後の川原寺や石神遺跡（II類、側石>底石）、3列にはほぼ統一される飛鳥宮III-B期（III類、側石=底石）、2列になる本薬師寺や興福寺（IV類、側石=底石）、と底石数が減じる。III類になると側石と底石のサイズが変わらなくなる。幅は1m前後となるI類から、50cm前後のIV類へと減じていく傾向がうかがえる。こうした変化は、各事例の造営年代からみて時期差に帰納すると考えられる。各類型の出現時期は、創建時期からみてI類が6世紀末頃、II類が7世紀前半～中頃、III類が7世紀後半、IV類が7世紀第4四半期頃と推定される。IV類は興福寺II期でも用いられるので、奈良時代まで確実に存続する。なお、信濃国分寺金堂（8世紀後半）や、三河国庁正殿SB501Cの雨落溝（9世紀）では底石が1列になることから、8世紀後半以降、さらに底石数が減じた類型が出現

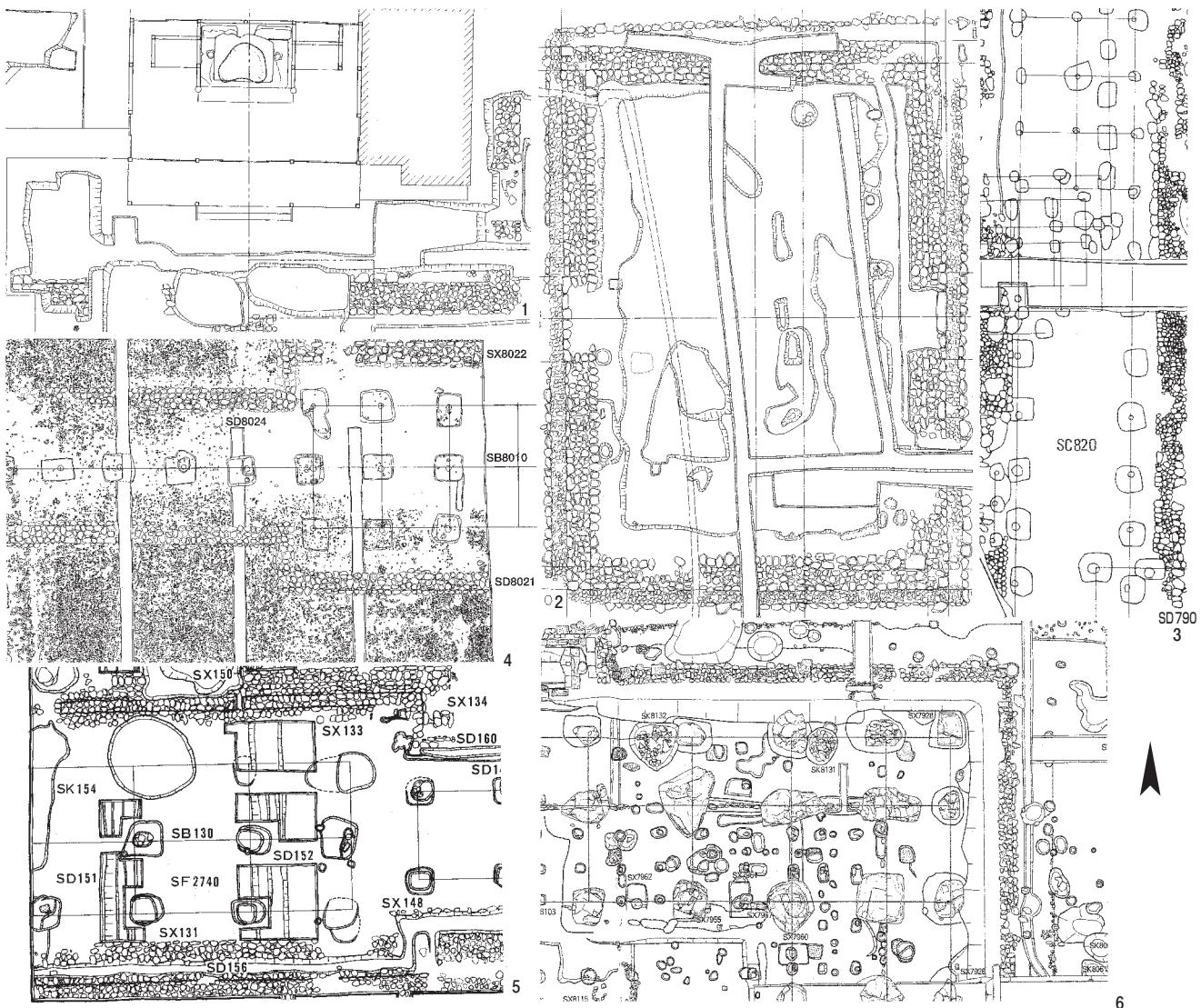


図77 亂石組雨落溝の事例 1:300

(1:飛鳥寺中金堂、2:川原寺西金堂、3:石神遺跡SD790、4:飛鳥京内裏南門付近、5:本薬師寺中門、6:興福寺中金堂北東部)

し、各地に広がっていった可能性がある（上田市立信濃国分寺資料館『信濃国分寺跡』1982・豊川市教育委員会『三河国府跡確認調査報告書』2003）。これをV類と呼んでおく。

変化の背景 まず、底石のサイズは飛鳥寺以降ほとんど大差ないが、少なくともⅡ類までは側石と底石のサイズがあきらかに異なるので、それぞれ違う大きさの石材を選択していたとみられる。ところが、Ⅲ類以降その大きさは大差なく、使用個所に応じた用材選択の必要がなくなる。寺院や宮殿造営技術が変化していった過程が垣間みえる。さらに雨落溝の幅が、底石数の減少とともにになって狭くなっていくことがわかる。幅が減じていく原因は、確言できないが、一案として軒先想定位置の鉛直下に溝を設ける、すなわち建物造営前に雨落溝を設ける場合と、実際に軒先位置を正確に割り出して溝を設ける建物造営後に構築する場合と、造営時のどの段階に構築されるかという点が変化した可能性があるのかもしれない。

川原寺の位置づけ おわりに川原寺について考える。周知のとおり川原寺は、これまで造営年代が判然とせず、『日本書紀』天武2年（673）3月条にある一切経書写の記事から、それ以前の造営との推定にとどまっている。先に検討したように、川原寺の雨落溝はⅡ類に位置づけられる。となると、石神遺跡A期と並行する時期、すなわち7世紀前半～中頃の可能性が高く、遅くとも7世紀中頃には造営されたと考えられる。このことは、有力視される川原宮跡に川原寺が創建されたとする推定とも矛盾しない。遺構的観点から寺院造営年代が推定可能な場合もあることを指摘しておく。今後は、各地における類例との相互比較を含めた検討をおこないたい。なお本稿は、筆者に課せられた平成21年度科学研究費補助金若手研究（B）「古代日韓における土木技術の系譜にかんする考古学的研究」の成果の一部を含む。

（青木 敬）